

学生支援の現場から

◆神戸山手大学・神戸山手短期大学
国際交流都市神戸での
地域貢献活動支援とキャリア支援

堀竹 功人
(学生・キャリア支援課長)

神戸山手大学・神戸山手短期大学は、神戸港を見渡し、背後には六甲山がそびえるという神戸市の中心地から北側約一キロに位置する正しく山の手の大学である。この「国際交流都市神戸」を舞台にした絶好のロケーションの中で、大学では「環境」、「都市交流」、短大では「ファッション」、「食」、「観光」、「ブライダル」、「芸術」等、その殆どが「国際交流都市神戸」に相応しい多彩なカリキュラム構成による教育活動を展開している。

各学科ともそのフィールドを十分に活かした授業を開講しているが、それに加え、課外活動としての学内クラブや正課授業との連携であるキャリア支援においてもそのフィールドを有効に活用し、学生支援を実施している。

課外活動を例に挙げると、大学祭では地域の自治会との連携で、隣接する公園で学生会が中心となり「鳥の巣箱」



ボランティアによる
学生ボランティアによる
本学周辺のごみ収集活動



大学祭での子供たちとの
モノづくりイベント

などの地元の子供たち向けのモノづくりのイベントに企画している。また学生会では楽しめるイベントのみではなく、本学周辺のゴミ収集ボランティア活動にも積極的に取り組み、年に二回の大掛かりな活動に加え、キャンパス間の授業移動時にもごみバサミと袋を抱え、公道のごみを収集するなどの地道な活動を行っている。その他の地域連携活動として、キャンパス内を流れる宇治川に生息するホタルを研究する「宇治川ホタル研究部」が中心となり「ホタル観賞会」を開催している。ホタル観賞会は部員が運

ゲンジボタル、夏呼ぶ光のダンス 神戸

神戸山手大・短大（神戸市中央区諏訪山町）構内を流れる宇治川で、ゲンジボタルが光のショーを繰り広げている。JR元町駅からわずか一キロと都心に近い観賞スポットは連夜、見物客でにぎわっている。

同大の吉岡英二教授（50）（海洋生物学）によると、もともと餌になるカワニナが多く生息している上、コンクリートの川床に土が積もり、幼虫からさなぎになる環境が整っていたという。以前は夏になると川の水が枯れて幼虫が死んでいたが、ここ十年ほどは水量も安定、二〇〇二年から成虫の姿が確認されるようになった。

川にかかる橋から見下ろすと、黄緑の光が明滅して飛び交うのが見られる。同大は来月六日まで平日の午後七時―八時半、ホタル観賞のためキャンパスを一般に開放。吉岡教授や学生がホタルの生態などについて質問を受け付ける。同大総務課 TEL 078・35117170 (森 信弘)

平成二〇年五月三〇日
神戸新聞夕刊

営全般を担当しているが、その取組姿勢は来場者からも好評を博している。期間中には地元市民を中心に二〇〇〇名程度の来場者があり、今では初夏の風物詩として定着している。このように地域社会との共存共栄が欠かせないことを学生自らも考え、環境配慮や地域社会に貢献しようという取組姿勢を示している。

一方、キャリア支援関連では大学正課授業との連携である「インターンシップ」で、地域連携に繋がる企業・団体等での実習に取り組んでいる。実習先の例を挙げると、地元配布されるフリーペーパーに発行社がある。地元での話題性のある取材先への同行に始まり、原稿作成に至るまで、

地元ではどのような情報が求められているのか、そしてそのニーズに応えるためには、何を提供すれば良いのかを実践的に学んでいる。また、神戸市中央区役所の「まちづくり推進課」にもお世話になり、地元との共催イベント企画や地元広報アシスタントとしての実習をさせていただいている。

短大でも正課授業との連携で、地元大手アパレルメーカーに訪問見学させていただくと同時に、卒業生で活躍するデザイナーや人事担当者の方々にインタビューし、質問力や傾聴力を高める機会を得ている。この活動はコミュニケーション力向上はもちろんのこと、社会に出て働くということの喜びや、仕事のやり甲斐などを知ってもらう絶好の機会となっている。

今後とも以上のような取組に加え、地域貢献意識の醸成や社会に出るための力強いステップに繋がるような学生支援プログラムを立案し、サポートしていきたいと考えている。入学時から学生生活支援に始まり、最終学年における就職支援に至るまでの学生満足度の向上が、本学の重要課題である。



アパレルメーカー訪問時に、会社のロビーでインタビューした卒業生と一緒に記念撮影